

中央大学父母連絡会

Kusano Midori

巻頭特集

FOCUS！ 総合政策学部

草のみどり

9

2020 September
Vol.321

2020年9月



Chuo University Parents Liaison Association



Be Ahead of the World

世界を動かす
人になろう

vol.03

学部独自の奨学金制度を
利用して世界へ

私は、国際経営学部の学生として、日々学びや発見にあふれた有意義な学生生活を送っています。学業もさることながら、積極的に課外活動にも参加しており、それによって今まで多くの実践的な学びを得ることができました。そのうちのひとつとして、国際経営学部独自の奨学金を利用し、2020年の春期休暇中に約1カ月間、フィリピンで語学研修とボランティア活動に参加したことが挙げられます。この奨学金は「アクティブスチューデント応援奨学金」というもので、明確な目標に向けて具体的な活動に取り組む国際経営学部の学生に対し、学生生活の活性化を促進することを目的として設けられています。1年次の夏季休暇中に



ごみ山に佇む民家

多くのストリートチルドレンが
住むスラム街へ

行われた国際経営学部の短期留学プログラムで、海外での生活や自己管理の方法を学べたことにより、異国の地に挑戦する勇気が持てました。私は国際開発分野に興味があるため、文献や写真などではわからないようなフィリピンのストリートチルドレンの現状を知るべく、この奨学金制度に応募し、入念に滞在計画を立てました。



積極的に学外活動に取り組む筆者

私は、ストリートチルドレンの現状を人々に知ってもらうための活動や経済的な支援活動に尽力しているボランティア団体に参加させていただきました。まず数力所のスラム街を訪問し、この団体の奨学金を受給している子どものお家で生活様式や経済状況についてヒアリング調査を行いました。どの家庭も経済状況が不安定で、資金面でのサポートを受けたいと思っていると切実に語ってくれました。実際に、学校に籍はあるものの家庭の仕事の手伝いで学校に通えない子どもも数多くいるそうです。発展途上国の根深い教育問題の現状を痛感しました。

ストリートチルドレンとの交流

ごみを集めることで生計を立ててい

自分の意志で
たたいた世界の扉

奥山 千波

国際経営学部国際経営学科2年
名古屋市長菊里高校(愛知県)出身

子どもたちの実態調査と食糧配布、子どもたちとの交流を行いました。私にとってこの活動が特に印象深く、衝撃でした。ごみ山に着いた瞬間の正直な感想として、ごみ山はとても人が生活できるような環境だとは思えませんでした。というのも、鼻を突く強烈なごみの匂いと、じつと立っていられないほどの大量のハエに、最初は戸惑わずにはいられなかったからです。そこで暮らしている子どもたちはごみを集めることで、1週間に約1千600円から2千100円の収入を得られるそうです。生きていくために環境より収入を優先せざるを得ないのが彼らの現状なのです。

そのほかにこのボランティア団体では、青空教室というストリートチルドレンと互いの文化を教え合うことや、



青空教室で交流している様子

アクティビティーを通じた交流の場を定期的に設けています。青空教室で出会った子どもたちは平日学校に通い、土日は観光客に路上でキーホルダーや装飾品を売っています。青空教室では最初、彼女たちの第一言語であるビサヤ語を教えてもらい、基本的な自己紹介や挨拶の仕方を学びました。その後は、厚紙に自分の手形にカットした折り紙を貼り、そこに各自が自分の夢や感謝の気持ちなど、自由にメッセージを書きました。また、アクティビティーとして一緒にダンスを踊ったり、箸で円形のチョコレートを運ぶ競争をしたりしたのも印象深いです。観光客として来訪したのであれば、このようにストリートチルドレンの生活や実際の無

From the Faculty of Global Management



国際経営学部
だより



自ら挑む人に

国際経営学部教授
ふか まち ひで お
深町 英夫

私は国際経営学部で、地域研究科目の「中国の政治と歴史」「中国政治社会論」、そして基礎教養科目の「歴史学」を担当しています。いずれの科目でも、私が学生たちに求めるのは、与えられた情報を受動的に覚えこむだけでなく、自ら能動的に問いかける学習姿勢です。

特に歴史という科目は、小学校から高校まで、教科書の内容を棒暗記するだけの、まさに受動的な学習に偏りがちです。私の授業では、いっさい暗記を求めません。「歴史学」の場合、近現代史上の重要事件について、さまざまな資料を読み比べ、そこに描かれている歴史像の違いを指摘してもらうのです。

たとえば、現在、世界の金融

センターである香港の動向を、世界中が固唾を呑んで見守っています。このような状況の出発点は、1997年の香港返還です。

そこで、鄧小平・サッチャー会談を経て返還を決めた「英中共同声明」、返還の際の江沢民主席やエリザベス女王・パッテン総督の声明、香港民主派や台湾当局の見解など、当事者の「生(なま)の声」を読み比べてもらいます(もちろん読解を助けるために、歴史的背景は事前に説明しておきます)。

各資料が示す香港返還の性質は、互いに大きく異なります。それらの比較という作業により、歴史に必ずしも唯一の「正解」はなく、角度を変えれば万華鏡のように姿を変える、多様な人々の「同床異夢」なのだと、学生たちは実感するでしょう。

ただ、多くの資料は硬い肉のようで、かみ砕き、飲みこむのは、かなり骨が折れます。それでも学生たちには、各種の媒体に氾濫する安易な言説のように、流動食的な情報に頼ってほしくありません。本学の建学の精神である「實地應用ノ素」を具え、世界の生(なま)の現実から自ら挑む人になってほしいのです。

ボランティア活動を通じて感じたこと

邪気で明るい素顔を知ることができなかったと思います。

「貧困層の人々は十分に教育も受けられず、毎日を生きていくのが大変で、幸せな生活を送ることができない」このような彼らに対する印象は先入観でしかありません。私自身も活動に参加して、少なからず日本での生活と比較

して彼らのことを考えていたことに気づかされました。確かに貧困層の人々が置かれている経済状況や生活環境は深刻であり、改善しなければなりません。さらに、子どもたちが十分な教育を受けるには時間もお金もかかります。だからといって、彼らは生活や将来に絶望し、つらいと思いつつながら日々を過ごしているわけではありませんでした。出会った子どもたちや彼らの親が「経済状況が大変でも、家族がいる

から毎日幸せだ」と私に語ってくれたことが非常に印象深いです。豊かな国に住んでいる人々が忘れがちな、人生において大切な気持ちを彼らは持っているのです。

最後になりましたが、このような貴重な留学経験や学びの機会や環境を提供してくださり、日ごろから温かく見守ってくれている両親をはじめ、国際経営学部の教職員の方々、関係者の方々に心より感謝申し上げます。